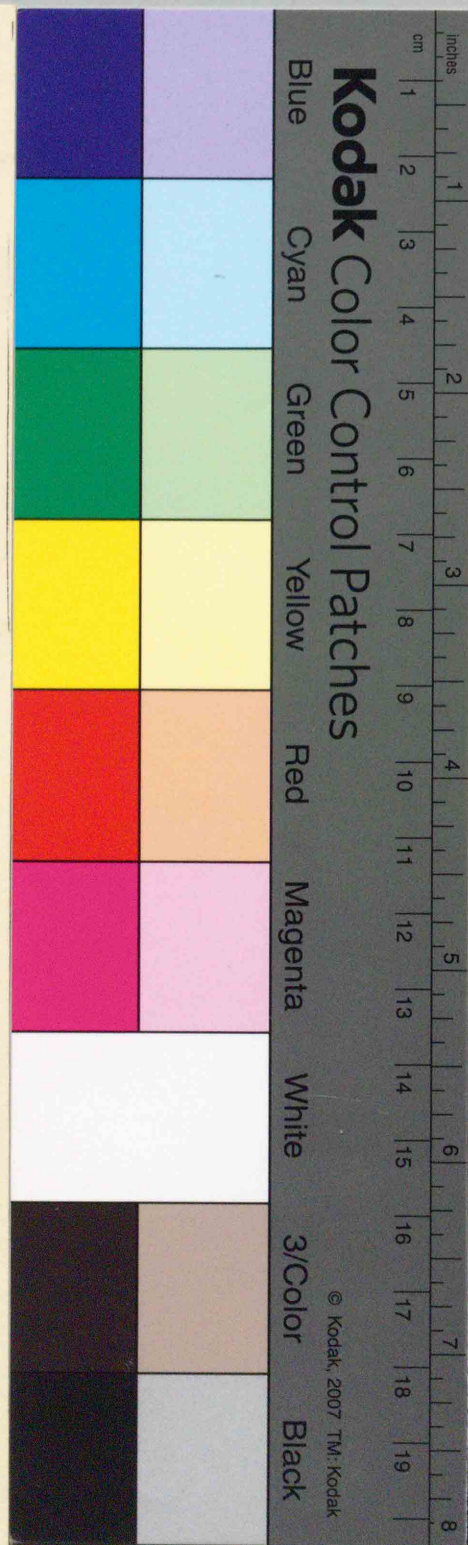


41041

教科書文庫

4
760
44-1942
01304 49434

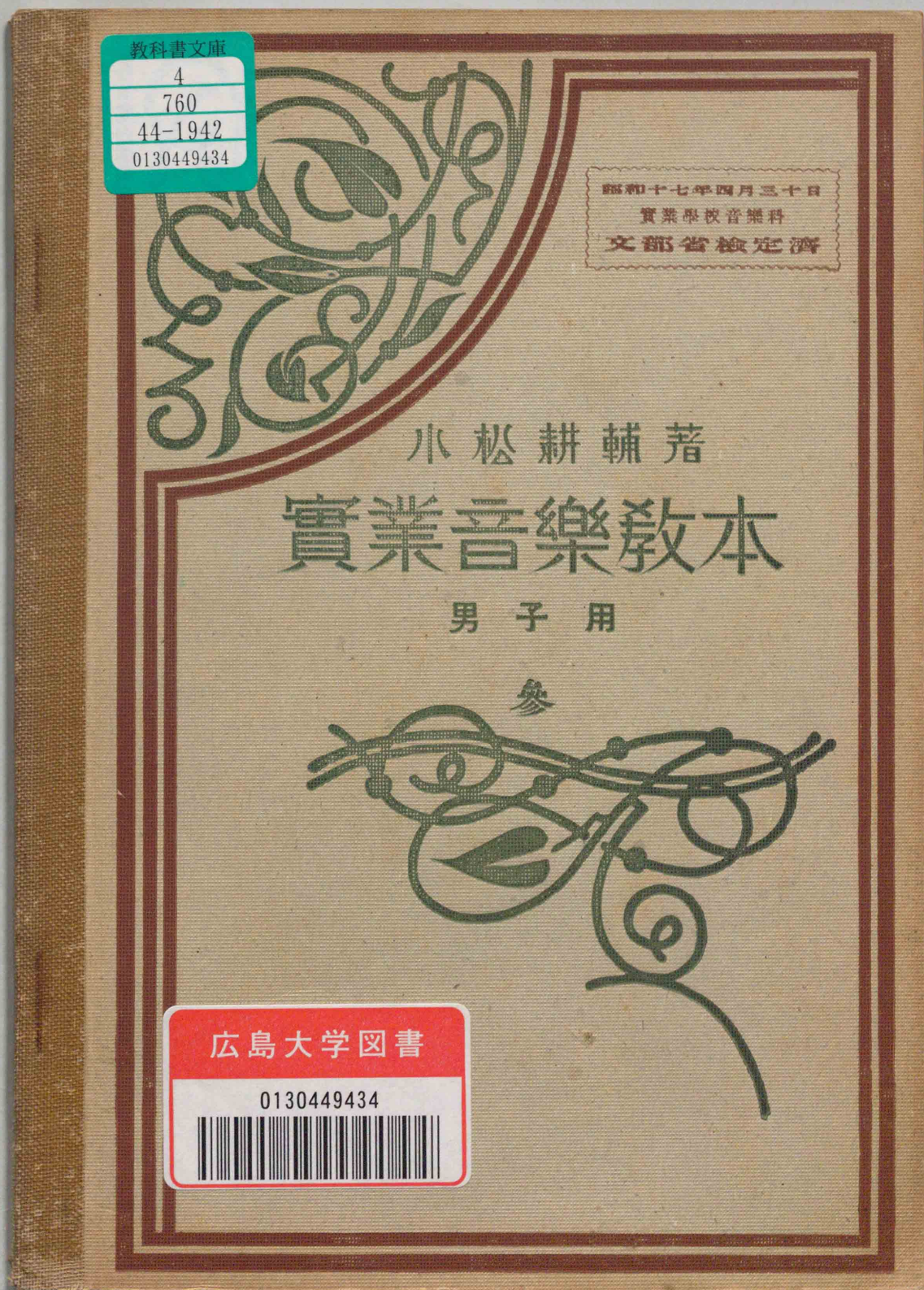


A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



中央図書館

教科書文庫

4

760

44-1942

0130449434



小松耕輔著

實業音楽教本

男子用

参



広島大学図書

0130449434



広島大学図書

0130449434



緒 言

- 一、本書は實業學校音樂科の新教授要目に準據して編纂したものである。
- 二、本書に集録した樂曲は、著者署名以外のものは皆各國の作曲者によつて作られたものである。
- 三、歌詞に署名なきものは著者自身の作にかゝるものである。
- 四、歌曲は二十一篇を収めてゐるが、教授の都合上、幾分これを加除し、他の曲を採録する場合を慮り、卷末に五線紙を添へて其の用に供した。
- 五、樂典は其の初步を授け、音程練習は階梯的に編纂して卷末に添へた。

昭和十七年二月

著 者

(2)

目 次

春來る	4
亡き友をしのぶ	6
いざゆけ若き子	8
雲 雀	10
梅雨の頃	12
遠 足	14
夏休暇	16
夏の朝	18
ふるさと	20
サンタ ルチア	22
露	24
富士山	26
騎兵隊	28
級會の歌	30
望 郷	32
雪のあした	34
兵 士	36
春かぜ	38
春の夕	40
Home, Sweet Home.	42

(3)

春 來 る

楽しく



1. イマ コソ キタ レリ タノ シ キ ハ ル
2. そら には みち たり あか る き ひ か



ハ モノ ミ ナ イ ノ キ ヲ ロ コ ビ タ タ
の や ま は あ を み て の ぞ み に も ゆ



フ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ
る ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら



ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ
ら ら ら ら ら ら ら ら ら ら

二

空には 満ちたり 明るき 光

野山は 青みて

希望に燃ゆる。

ラ、ラ、ラ、ラ、
ラ、ラ、ラ、ラ、
ラ、ラ、ラ、ラ、

一 今こそ 来れり 楽しき 春は。

ものみな 生命を

よろこび たたふ。

ラ、ラ、ラ、ラ、
ラ、ラ、ラ、ラ、
ラ、ラ、ラ、ラ、

春 來 る

麻 上 俊 延

亡き友をしのぶ

わびしく

1. マタ ハルメグ レドカヘ ラスワガ トモ
2. はな さきみつ れどかへ らぬよき とも

イ ソシ ム ム ツ ミー シ スギ シ ヒ オ モ
く れ ゆ く ま ど ベー に あ も か げ し の

ハ ー バ ソ ズ ロ ニ ナ ツ カ レ
ハ ー バ ら れ ひ は み に し ひ

亡き友をしのぶ

また 春 めぐれど かへらぬ わがとも。

いそしみ むつみし

すぎし日 おもへば

そゞろになつかし。

二

花 咲き 満つれどかへらぬ よきとも。

暮れ行く 窓邊に

面影^{おもかげ} しのべば

うれひは 身にしむ。

麻上 俊延

いざゆけ若き子



1. イ ザ ユ ケ ワ カ キ コ イ ザ ヤ
2. と く ゆ け ひ かり の こ ら よ



ヲ ヲ シ ク ス ス ミ ユ ケ
あ し ど り い さ ま し く



カ ガ ヤ ク ヒ カ リ ヲ ユ ク テ ニ ア フ ギ テ
は る け き を か こ え き ば う の か な た へ



イ ザ ユ ケ ワ カ キ コ コ
と く ゆ け ひ かり の こ

いざ行け
若き子 いざや、
ををしく 進み行け、
かゞやく 光を
行く手に 仰ぎて。
いざ行け
若き子よ。

いざゆけ若き子

とく行け
光の子らよ、
足どり いさましく、
はるけき 丘越え
希望の かなたへ。
とく行け
光の子。

二
藤上俊延

雲 雀

軽く *mf*

1. ミト ヨホ ヤク アト ガル ヒソ バラ リ ノ
 2. みと ほ やく あと が る ひそ ばら に はな

ニハカスミ タナビキ ハミ タニムギノ
 キツマヒツ タノシク ミヨナアガ
 るのひかげ ららしに はみよのあ
 きつまひつ たのしく みよのあ

ホ ア フ シ ア レ ア レ ア レ
 ヒ バ マ ソ ア レ ア レ ア レ
 の に み つ あ れ あ れ あ れ
 ひ ば り

雲 雀

見よやあがる雲雀、野にはかすみたなびき、
 畑にむぎの穂青し。遠く遠くそらに
 啼きつまひつたのしく、見よやあがる雲雀、
 あれ、あれ、あれ。

見よやあがる雲雀、春のひかげうららに、
 花のにほひ野にみつ。遠く遠くそらに、
 啼きつまひつたのしく、見よやあがる雲雀、
 あれ、あれ、あれ。

梅雨の頃

感情をこめて



1. ク ラ キソラニ ク モハーヒ ククターレ
2. ま ど によれば こころーい とどわーび



テーサビシクヒビクハア
しーはかげにぬれつつら



メノササヤキヨアヲパニフ
たふとりのねもあくがれし



ラシクアメノオトロ
たふかあをきそらをー

梅雨の頃

一暗き 空に

雲は 低く 垂れて、

淋しく響くは 雨のささやきよ、

青葉に 降りしく 雨の 音よ。

二窓に 凭れば

こゝろ いとど 侘びし。

葉蔭に濡れつゝ 歌ふ鳥の音も

あくがれ 慕ふか 青き 空を。

麻上俊延

遠 足

元氣よく



1. カゼーソヨギソーラーハレテヒ
2. かぜーさよくそーらーすみてひ



ハウララミーモーカーシイガヤユカンハル
はーうららみーもーかるしいざやゆかんあき



ヲモトメテミソラタカクナクハヒバリカキ
をもとめてをちのそらにまふはとんびかき



ケキケソノーコーエキケキケソ
けきけそーのーこーえきけきけそ



ノウータヨロコビニミチテコテフモマヒイデハ
のーうーたゆたけきはみのりこばちもまひいでい



ナハサキミヅハルーノノメ
なーどとびかふあきーののべ

遠 足

葛 原 幽

一 風そよぎ 空はれて、日は うらら、身も輕し、
いざや行かん、春をもとめて。

御空高く啼くは雲雀か

きけ、きけ、其の聲、きけ、きけ、其の歌、

喜に満ちて、胡蝶も舞ひ出で

花は咲き満つ、春の野邊

二 風きよく 空 すみて 日は うらら、身も輕し、

いざや行かん、秋をもとめて。

遠の空に舞ふは鳶か、

きけ、きけ、其の聲、きけ、きけ、其の歌、

豊けきは實のり、小蜂も舞ひ出で

蝗飛び交ふ、秋の野邊。

夏 休 暇

楽しく



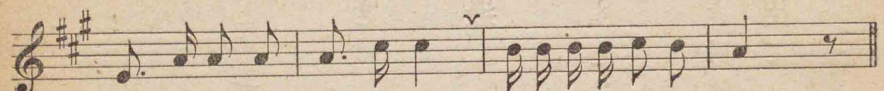
1. ア ツ サ モ モ ノ カ ハ イ マ コ ソ マ ナ ツ
2. あ つ さ も も の か は い ま こ そ ま な つ



マ ナ ツ フ ヨ ロ コ ビ ム カ ヘ シ ワ レ ラ
ま な つ を よ る こ び む か へ し わ れ ら



ア サ ツ ユ チ ラ シ テ ア カ ツ キ ノ ヤ マ ミ ナ ウ
さ か ま き ま せ くる あ ら な み を の り こ え な



タ ヒ テ サ マ ヨ フ マ タ ナ ク タ ノ シ
ぎ さ に さ さ や く さ さ な み ち ら し



ト モ ド チ ハ ラ カ ラ カ タ ラ ヒ テ ア
ク ル ヒ モ ク ル ヒ モ
こ ぶ ね を あ や つ り ち よ ぎ を ば き
く る ひ も く る ひ も



ツ バ ン タ ノ シ キ ワ レ ラ
そ ひ て た の し き わ れ ら

夏 休 暇

一 暑さも 物かは 今こそ眞夏
眞夏をよろこび迎へし我等

朝露散らして、 曉の山路

歌ひてさまよふ、 又なく樂し、

友どち、 はらから、 かたらひて遊ばん、

來る日も、 來る日も 樂しき我等

二 暑さも 物かは 今こそ眞夏

眞夏をよろこび迎へし我等

逆卷き寄せ來る荒波を乗り越え

渚に さゝやく漣ちらし、

小舟を あやつり 泳をば きそひて

來る日も 來る日も 樂しき我等

葛 原 菫

夏の朝

すがすがしく



1. ソーラサミドリニハレタダカクカー
2. ひーはまぶしくもこのまもれてこー



ゼソヨソヨトアヲバヲタルカー
ゑほがらかにとりはうたふくー



キノアサガホツユニヌレテアー
らきみのもにかーげをうつすもー



サノヒカリニキーヨクサケリココ
りのしらゆもかーをりゆかしここ



チヨキハナーツノアシタ
るすむはなーつのあまよ

夏の朝

麻上俊延

空

さみどりに

晴れて

たかく

風

そよそよと

青葉

わたる。

籬

朝顔露に

濡れて、朝の

光に

清く咲けり。

心地

よきは

夏の晨朝

二

陽は

まぶしくも

樹の間

洩れて、

聲

ほがらかに

鳥は歌ふ。

白百合

薫り

床し。

暗き

水面に

影を映す、森の

白百合

薫り

床し。

心

澄むは

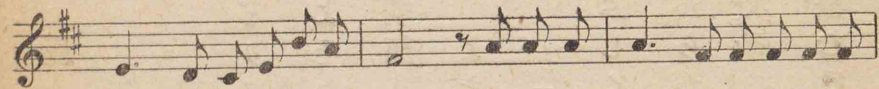
夏の朝よ。

ふるさと

感情をこめて



1. ナツカ シ ノノベヨモ リ ヨ ナツカ
2. なつか し のかはよみ づ よ なつか



シ ノフルサト ヨ ミチノ ベ ニヒラクヲ
し のふるさと よ たそが れ にながる



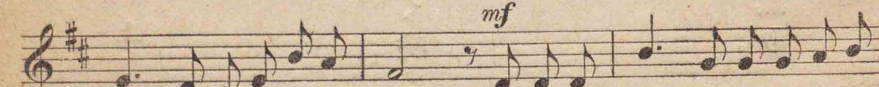
グサ アサツ ユ ニヒヲツツ シ ホソキ
み づ ゆふば え のいろにそ み しげり



ミ チヲレテユ ケーバ キリギ シ ニエダハタ
た るいばらの しーた らをつ り しふちもあ



レ クダリ ユ クサカノシ タ ニ ケムリ
り かなた なるはしのう へ を ひとの



タ ットモノイ へ ナツカ シ ノノベヨモ
か げとほりゆ く なつか し のかはよみ



リ ヨ ナツカ シ ノフルサト ヨ
づ ま なつか し のふるさと よ

ふるさと

一

なつかしの野邊よ森よ、
なつかしのふるさとよ。
道の邊にひらく小草、
朝露に日を映し
細き道折れて行けば、
斷崖に枝は垂れ、
下りゆく坂の下に
煙立つ友の家。
なつかしの野邊よ森よ、
なつかしのふるさとよ。

二

小松清

なつかしの川よ水よ、
なつかしのふるさとよ。
たそがれに流るる水、
夕映の色に染み、
しげりたるいばらの下、
魚釣りし淵もあり。
かなたなる橋の上を
人の影通りゆく。
なつかしの川よ水よ、
なつかしのふるさとよ。

サンタ ルチア

楽しく *p dolce*

1. ソ ラ ニ シ ロ キ ッ キ ノ ヒ カ リ
 2. し ろ が ね の な み に ゆ ら れ
 3. ト モ ヨ イ ザ フ ネ ニ ノ リ テ

f *mf*

ナ ミ フ フー ク ソ ヨ カ セ ヨ
 ム ね は か ろ く ろ み を ゆ く
 ナ ミ ラ コー エ ト ク ユ カ ン

カ ナ タ シ マ ヘ ト モ ヨ ユー カ ン
 か な た し ま ヘ こ よ ひ ま た
 カ ナ タ シ マ ヘ ト モ ヨ イ ザ

p

I II

サンタールーチア サンタルチア サンタルチア
 サンタールーチア サンタルチア サンタルチア
 サンタールーチア サンタルチア サンタルチア

サンタ ルチア

一 空にしろき月の光 波を吹くそよ風よ。
 かなた、島へ、友よゆかん。

二 しろがねの波にゆられ、舟はかろく海をゆく、
 かなた、島へ、こよひまた。

三 友よいざ舟にのりて、波を越えとくゆかん、
 かなた、島へ、友よいざ。

サンタ ルチア、サンタ ルチア。
 サンタ ルチア、サンタ ルチア。

(註・サンタ ルチアは伊太利ナポリ市の沖にある島の名)

小 松 清

露

優美に

mf



1. ア サ - ヒ ノ ヒ - カ - リ
 2. ゆ ふ - ベ の ほ - し - の
 3. ミ ソ - ラ ト ツ - チ - ト



ソ ノ フ ニ - サ - セ - バ
 く さ ば に - て - れ - ば
 ナ カ コ ソ - ヘ - ダ - テ



ハ ズ - エ ノ ツ - ユ - ハ
 は ご - と に つ - ゆ - の
 ヘ ダ - テ ス モ - ノ - ハ



マ タ マ ト - ヒ - カ - ル
 た ま こ そ - に - ほ - へ
 ヒ カ リ ト - ツ - ユ - ト

露

朝日のひかりそのふにさせば、

葉末の露は眞玉とひかる。

夕の星のくさばにてれば、

葉ごとにつゆの玉こそほへ、

み空とつちとなかこそへだて、

へだてぬものは光りとつゆと。

富士山

壮大に



1. トウ カ イ ヒーハー イ ズ ヤー マ ト シー マー
 2. さい か い ひーはー い る やー ま と しー まー



ネ クー モ マ ニ ヒ イ デ テ カ ガ
 ね くー も ま に ひ い で て ほ ほ



ヤ ク フ ジ ノ ネ ワ ウ ジャ ブ リ ユ タ
 ぶ む ふ じ の ね せい じゃ ぶ り ゆ か



ケーク ト ハ ニ ソ ツ リ タ ツ
 しーく と は に そ そ り た つ

富士山

葛原 函

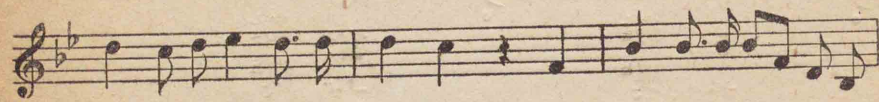
東海 日は出づ 大和島根、
 雲間にひいてて 輝く富士の峯、
 王者振 豊けく
 永劫に そそりたつ。
 西海 日は入る 大和島根、
 雲間にひいてて ほほゑむ富士の峯、
 聖者振 床しく
 永劫に そそりたつ。

騎 兵 隊

勇ましく



1. ダイ ナ フ ケー リ カ ゼ サ キ ノ ヲ
2. そ ら は あ を ー く は て な し し ら



コ エ テ カ ケ キ タ リ ク ル ト ミ レ ー バ タ
く も は る か う か ぶ ゆ く て と ほ ー く か



チ マ チ ヒ ロ ノ ト ホ ク キ エ ユ ク
け ゆ く こ れ を の こ の ち か ら



イ ー サ マ シ キ ヘ イ タ イ バ ジ ャ ー ノ ス ガ タ フ ー フ ー シ
い ー さ ま し き ヘ い た い ば じ ゃ ー の す が た を ー を ー し

騎 兵 隊

小 松 清

一 大 地 を 蹴 り 風 裂 き
野 を 越 え て 駈 け 來 り、
來 る と 見 れ ば 忽 ち
廣 野 と ほ く 消 え 行 く。
勇 ま し 騎 兵 隊、 馬 上 の 姿 雄 々 し。
二 空 は 青 く は て な し、
白 雲 は る か 浮 か ぶ。
行 く 手 遠 く 駈 け 行 く、
こ れ ぞ 男 の 子 の 力。
勇 ま し 騎 兵 隊、 馬 上 の 姿 雄 々 し。

級 會 の 歌



1. キ ト タ レ ヤ ト モ ヨ イ ザ コ ■ ト モ
 ト モ ド モ マ ナ ブ ワ レ ラ ガ ト モ
 2. う た は ん い ざ や わ れ ら の う た
 こ ら を ば あ ふ ぎ む ね を ば は り



タ ノ シ キ マ ト キ イ マ ズ コ コ ニ マ
 も ろ と も う た ひ こ 系 の か ぎ ー り わ



コ ト ト ア イ フ テ カ ヒ ー ア ハ ー ン
 か さ の さ ら を た た へ ー ぼ が ー ん

級 會 の 歌

一 來れや 友よ、いざこよ 友
 ともども學ぶ、われらが 友

たのしき まとる
 今ぞ こゝに、

眞實と 愛を 誓ひ 合はん。

二 歌はん いざや、我等の 歌

空をば 仰ぎ、 胸をば 張り。

もろとも 歌ひ、

聲の かぎり

若さの 幸を たたへ 祝がん。

麻 上 俊 延

望 郷

情をこめて



1. イ リ ヒ ニ ク モ ハ ア カ ク ハ エ テ カ
2. た ら ち ね い か に お は し ま す や い



ゼ ノ ネ ム セ ブ プ ナ ノ エ ダ ニ エ と
と し き と も は た れ と あ そ ぶ と



フ ナ リ ク レ バ ソ ズ ロ コ ヒ シ オ の
し つ き な れ し や ま よ か は よ の



モ ヒ デ オ ホ キ キ ホ キ ロ キ ャ ウ ー
ど け く い ま も わ れ を ま つ や

入りに 雲は
赤く 映えて、
風の音 咽ぶ
山毛櫨の枝に。
夕さり くれは
そゞろ戀ひし、
想ひ出 多き
遠き 故郷。

望

郷

たらちね いか
おはしますや、
いとしき ともは
たれとあそぶ。
としつき 馴れし
山よ、河よ、
のどけく いまも
我を 待つや。

麻上俊延

雪のあした

感を以て美しく

1. フ キ マ ク フ ブ キ ハ ア ト ナ
 2. き ぎ に は い ち ど に は な さ

ク ナ ゴ ミ テ シ ハ ツ カ ニ ア ケ ユ
 さ に ほ り て { の ど か に あ ひ と し

{ ク ノ モ セ ノ ケ シ キ ヨ
 { く シ は や し キ サ ヤ ケ シ よ
 { ほ ひ か り の の け し き ゑ

雪のあした

吹きまくふぶきはあとなくなごみて、

静かにあけゆくのもせの景色よ、

はてなくつゞける白雪さやけし。

二

木々には一度に花咲きにほひて、

のどかにあけゆく林の景色よ、

朝日にひとしほ光りぞてりそふ。

兵 士

悲壯に *p*

1. タ マ ノ ヒ ビ キ キ エ ヌ ノ モ セ ヲ ツ ツ ム
 2. か ぜ ふ く の を す す ー み あ め ふ る よ は に
 3. ヒ ハ オ チ ヤ ミ ト ザ ー シ ナ ベ テ ハ イ マ ヅ

p

シ ジ ー マ イ ク サ ヲ ハ リ ヒ ハ ー シ ヅ ミ イ
 た ー ち ー と も に か た り と も ー に ぶ み ち
 イ コ ー フ ソ コ ク ノ タ テ ミ ニ ー ト リ テ ヲ

f

コ フ カ タ ヘ ニ ト モ ハ ナ シ ト モ ハ ム ナ シ ク ナ リ ー ヌ
 か ら あ は し し と も は な し と も は む な し く な り ー ぬ
 ノ コ ノ ツ ト メ ヲ ハ リ タ ル ト モ ヲ ヤ ス ケ ク ネ ム ー レ

兵 士

小 松

清

一 たまのひびき消えぬ、

野もせをつゝむしじま、

いくさ終り日は沈み、

いこふかたへに友はなし。

友はむなしくなりぬ。

二 風吹く野をすゝみ、

雨降る夜半に立ちて、

ともに語りともに笑み、

力あはしし友はなし。

友はむなしくなりぬ。

三 日は落ち闇とざし、

なべてはいまぞいこふ。

祖國の盾身にとりて、

男の子のつとめ終りたる

友よやすけく眠れ。

春 か ぜ

やや早く
mf

1. ナレハワラヒトハカウタノ
ウレヒシラヌハルカゼノ
2. なびくさやかなるきはるつかぜの

コドモロモソソラニウクヨル
こころもそぞろゆくよる
しづかに吹きてめぐる

モモチハルツキセヌヨロコビコメ
ももちらはるかにはらぬのぞみをとめ

テフケヤフケヤママニノベニ
てあそべあそべやまにのべに

タノシクフケヤハルカゼ
たのしくあそべはるかぜ

春 か ぜ

一 花は笑ひ鳥はうたふ、心も空にうくよ。

うれひ知らぬ春かぜの、のどかにふきてめぐる。

も、ちはるつきせぬ、よろこびこめて、

吹け、や吹けや山に野邊に、楽しく吹けや春かぜ。

二 なびく柳とぶつばめ、心もそぞろゆくよ。

つばさかろき春かぜの、しづかに吹きてめぐる。

も、ちはるかはらぬ、望みをこめて、

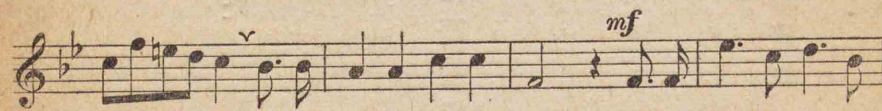
あそべ遊べ山に野邊に、楽しくあそべ春かぜ。

春の夕

静に



1. ユフ ヒハシヅ ミユクムラ サキアカ
2. はる の ひくれ てゆーくすずをばなら



ネー---ニクモヲバソメテ ユフカゼヤサ
し---てひつじはねやへ とりのねさえ



シーク コズ エヲナラ セーバ ホシ
ゆーき こてふもねむ れーば ゆふ



カゲユメ ノゴトマタ タ---キソメ ス
もやけむ るごとのもせ---をつつじ

春の夕

麻上俊延

春の日 暮れて行く。 鈴をば 鳴らして

羊は ねやへ。 鳥の音 消えゆき、

胡蝶も 眠れば、 夕もや 煙ること

野もせを包む。

夕日は 沈みゆく、

紫あかねに

雲をば 染めて。

夕風 やさしく

梢を 鳴らせば、

星影 夢のごと

またたき 初めぬ。

Home, Sweet Home.



1. 'Mid pleas - ures and pal - a - ces though we may roam,
 2. An ex - ile from home splen - dor daz - zles in vain;



Be't ev - er so hum - ble, there's no place like home;
 Oh, give me my low - ly thatch'd cot - tage a - gain;



A charm from the skies seems to hal - low us there,
 The birds sing - ing gay - ly, that came at my call;



Which, seek thro' the world, is ne'er met with else - where.
 Give me them and that peace of mind, dear - er than all.



Home, home, sweet, sweet home, There's
 Home, home, sweet, sweet home, There's



no place like home, there's no place like home.
 no place like home, there's no place like home.

Home, Sweet Home.

1. 'Mid pleasures and palaces though we may roam,

Be't ever so humble, there's no place like home;

A charm from the skies seems to hallow us there,

Which, seek thro' the world, is ne'er met with else-

where. Home, home, sweet, sweet home, There's

no place like home, there's no place like home.

2. An exile from home splendor dazzles in vain;

Oh, give me my lowly, thatch'd cottage again;

The birds singing gayly, that came at my call;

Give me them and that peace of mind, dearer than all,

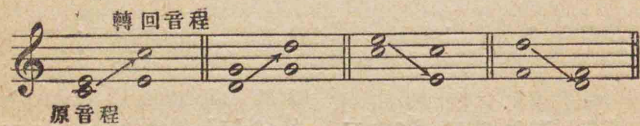
Home, home, sweet, sweet home, There's

no place like home, there's no place like home.

樂典

音程の轉回

音程を構成する二音の中、下位の音を一八音上に移し、又は上位の音を一八音下に移すことを音程の轉回と稱し、原位置の音程を原音程、轉回された音程を轉回音程と稱へる。轉回された音程の度数は九の數より原音程の度数を減じた數に相當する。即ち三度は六度(9-3=6)四度は五度(9-4=5)となる如くである。



音程を轉回すると其性質を變ずるものと、變じないものがある。即ち轉回により、長音程は短音程となり、短音程は長音程となり、増音程は減音程、減音程は増音程となる。唯完全音程のみは轉回しても完全音程として其性質を變じない。



協和音程と不協和音程

二つの音を同時に奏する時、聽者に調和満足之感を與ふるものを協和音程といひ、然らざるものを不協和音程と稱へる。協和音程は更に完全協和音程、不完全協和音程の二種に分けることが出来る。前者は極めてよく協和し、後者は協和の度が少々前者に劣るものである。

協和音程	完全協和音程	完全一度	完全四度
		完全五度	完全八度
不完全協和音程		長三度	短三度
		長六度	短六度

以上の協和音程を除いた長、短二度、七度、及びすべての増、減音程は不協和音程である。

不協和音程	長二度	短二度
		長七度
	すべての増、減音程	

音階各度の名稱

音階の各音には長短兩音階とも次の如き名稱が附されてをる。

一度 二度 三度 四度 五度 六度 七度

長音階

短音階

主音 上主音 中音 下屬音 屬音 下中音 導音

和 聲 學

二個以上の音程音名を異にせる樂音が同時的に結合せられた時には、これを和音と稱へる。和聲學は是等の和音の取扱方法を研究する學問である。

三 和 音

或一音を基礎として、それに三度と五度の音を重ねた音の一群を三和音と稱へる。三和音は其基礎の音を根音、三度上の音を三音、五度上の音を五音と稱へる。

五音
三音
根音

三和音には次の四種類がある。

1. 根音に長三度と完全五度の結合したるもの、これを長三和音といふ。
2. 根音に短三度と完全五度の結合したるもの、これを短三和音といふ。
3. 根音に長三度と増五度の結合したるもの、これを増三和音といふ。
4. 根音に短三度と減五度の結合したるもの、これを減三和音といふ。

1 2 3 4

長三和音 短三和音 増三和音 減三和音

以上のうち長三和音、短三和音の兩者を協和和音といひ、増三和音、減三和音の兩者を不協和和音と稱へる。いま長短兩音階の各音の上に三和音を構成すると、次の如き各種の三和音を得ることが出来る。

長音階各度上の三和音 短音階各度上の三和音



上掲のローマ数字は音階の各度と其三和音の種類とをあらはすもので、大字は長三和音を、小字は短三和音を、大字の右肩に+の附されたるものは増三和音を、小字の右肩にoの附されたるものは減三和音をあらはす。

四 聲 音

和聲の練習は普通四聲を以て行はれるものである。四聲とはソプラノ、アルト、テノール、バスの四つの聲をいふので、そのうちソプラノとバスを外聲といひ、アルトとテノールを内聲と稱へる。



四聲のうちソプラノとアルトは女聲でテノール

ルとバスとは男聲である。これ等の聲には各一定の音域があつて、諸聲の進行は各その音域内に於て行はれる。



三和音によつて四聲の和聲を作るには三和音中の或音を重複しなければならない。此場合には根音の重複が最もよく、第五音の重複はこれに次ぎ、第三音の重複は稀に行ふのである。但し導音の重複は特別の場合の外これを避ける。



又聲音の進行上三和音中の或音を省略する必要の起る場合がある。其時には第五音を省略し、

根音と第三音とはこれを省略することが出来ない。



聲音の進行

聲音の進行には並進行,反進行,斜進行の三種がある。

並進行とは二聲音が同時に上又は下に同一の方向を以て進行するものをいふ。



反進行とは一聲音が上行するに對し他の一聲音が下行して全く反對の方向に進行するものをいふ。



斜進行とは一聲音が同度に靜止し,他の一聲音が上又は下に進行するものをいふ。



四聲音の進行に於ては,以上三種の進行が混用されるものである。

和音の連結

和音の連結は,各聲音をして最も圓滑に且自然に進行せしめるのが本旨である。次に和音の連結に關する諸法則中最も重なるものを掲げる。

1. 連結せんとする兩和音に,共通せる音のある場合にはなるべく同一聲音部に保續させ殘餘の諸聲音はその和音に近接する位置に進行させる。



2. 連結せんとする兩和音に共通する音の無い場合には低音に對して他の諸聲音は反進行をな

し、前和音に最も近い位置に各音を進行させる。



3. 二つの聲音が互に完全八度の間隔を以つて並進行をするときは之を並行八度といひ、二聲音が互に完全五度の間隔を以て並進行をする時には之を並行五度といひ、兩者ともに其の進行を禁止される。



4. 完全八度以外の音程より完全八度に並進行するものを隠伏八度といひ、完全五度以外の音程より完全五度に並進行するものを隠伏五度といふ。

隠伏進行は概して許されるものであるが、隠伏八



度が外聲間に生ずる場合は一般に禁止される。但し上聲部が半音の上行をとる時、又は全音の下行進行をする時、並びに同度和音内に生ずる場合は許される。



隠伏五度も外聲間に生ずる時は禁止されるものであるが、主和音(一度)より屬和音(五度)に、下屬和音(四度)より主和音に進む時、並びに同度和音内に生ずる時は許される。



5. 二度以上にわたる増音程の進行は概してこ

れを禁止する。



6. 導音は、次續する和音に主音を含んでゐる時には、半音上行せしめてこれを主音に進行させる。但し内聲にある場合は下行しても宜しい。



三和音の轉回

三和音は根音を低音に置くものを基本和音といひ、三音或は五音を低音に置くものを轉回和音と稱へる。



根音を轉回して第三音を低音とする和音を六の和音といひ、 $\overset{6}{\underset{3}{}}$ 又は 6 の數字を低音上に記して之を指示する。

根音と三音とを轉回して、五音を低音とする和音を四六の和音といひ、 $\overset{6}{\underset{4}{}}$ の數字を低音上に記して之を指示する。



六の和音を以て四聲音を作る場合には、基本和音と同じく根音の重複を以て最良とし、五音はこれに次ぎ、三音も場合によつて之を重ねることが出来る。又四六の和音は五音の重複が最も宜しい。

七の和音

三和音の第五音の上に更に三度の音を加へたものを四和音又は七の和音と稱へる。七の和音は三和音と同じく長短兩音階の各度の上に構成

することが出来る。

長音階各度上の七の和音



短音階各度上の七の和音



七の和音はすべて七度の不協和音を含んでゐるから他の協和和音に進行する必要がある。これを七の和音の解決と稱へる。

七の和音は低音上に $\begin{matrix} 7 & 7 & 7 \\ 5 & 5 & 3 \\ 3 \end{matrix}$ 又は 7 の數字を記してこれを指示する。

七の和音は屢第五音を省略して根音を重複することがある。

第五音の省略



屬七の和音

七の和音中最も重要で且つ屢使用されるものは長短兩音階の屬音(第五度)上に構成される七の和音で、之を屬七の和音と稱へる。

屬七の和音は普通主和音と連結する。その場合に於ける各聲音の進行は次の如くである。



屬七の和音の轉回

屬七の和音もまた轉回の位置に於て用ひられ、その解決は基本和音と同一である。



屬七の和音の根音を轉回して三音を低音とするものを五六の和音といひ、 $\begin{matrix} 6 \\ 5 & 6 \\ 3 \end{matrix}$ 又は $\begin{matrix} 6 \\ 5 \\ 3 \end{matrix}$ の數字を低音に記してこれを指示する。

根音及び三音を轉回して五音を低音とするものを三四の和音といひ、低音上に $\frac{6}{4}$ 又は $\frac{4}{3}$ の數字を記してこれを指示する。

根音、三音及び五音を轉回して七音を低音とするものを二の和音といひ $\frac{6}{2}$ 或は $\frac{4}{2}$ 又は $\frac{2}{2}$ の數字を低音上に記してこれを指示する。

終 止 法

樂曲の終止法には種々あるが次に正格終止、變格終止の二種類をあげる。正格終止は屬和音又は屬七の和音より主和音に進行するものをいひ、變格終止は下屬和音より主和音に進行するものをいふ。變格終止はおもに讚美歌等に用ひられる。

正 格 終 止 變 格 終 止

C: V I V₇ I IV I IV I

轉 調

樂曲に變化を與へんがために或調から他の調

に轉ずることを轉調と稱へる。轉調には種々の方法があるが、最も普通に行はれるのは或調より其關係調に轉ずる方法である。今ハ長調によつて其關係調を示せば次の如くである。

ハ長調	{	— ト長調 — ホ短調
		— イ短調
		— ヘ長調 — ニ短調


轉調の順序は普通新舊調の共通和音、新調の屬和音又は屬七の和音、及び新調の主和音との結合によつて行はれる。


ハ調よりト調へ ハ調よりヘ調へ


C: I VI VI I C: I I


G: I V I F: V V₇ I V₇ I


轉調及び諸調の練習


34 


35 


36 


37 


38 


39 


40 

41 

42 

43 

44 

45 

46 

47 

48 

49 

50 

51 

52 

53 

54 

55 

56 

昭和十七年四月十日印刷

昭和十七年四月十四日發行

實業音樂教本 參	著作權 所有	定價 金三十拾七錢
----------	-----------	--------------

著者 小松耕輔

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 發行者 中等學校教科書株式會社
 代表者 山本慶治

東京市神田區小川町二丁目十二番地
 印刷者 株式會社 秀英社
 (東東4123) 代表者 西川喜右衛門

發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地

中等學校教科書株式會社

日本出版文化協會會員番號117522

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九

(略名) 目黒小松實音樂

8.11.64

広島大学図書

0130449434

